日本歯科医史学会々誌・第24巻
第1号通巻90号・平成13年2月

法華経の中の“歯”，“口”，“舌”[*1]

日　高　三　郎[*2]

要旨：古い伝承文献である法華経経典の中から歯科医学関連の単語として，歯，口，舌を含んだ語句を採り出しそれらの表現について検討した．歯，口，舌の語句は特徴的に三十二相・八十種好の中で釈尊の尊貴な姿を賛えるために使用されていた．一方，病的ないし不健康状態については歯の着色・形状・歯並び，口臭，舌の病気に関する表現が見られた．病的状態の原因について，仏法では善因善果，悪因悪果という因果応報で説明している．このことは現代人の考える病因論とは非常に異なっている．しかし，これら法華経中の歯，口，舌に関する表現の中には現代に通じるものがあり，われわれの健康・審美思想は法華経経典から強く影響を受けていると考えられた．

Key words：歯 Tooth，口 Mouth，舌 Tongue，法華経 Lotus Sutra，表現 Expression

はじめに

現実の人間は一個であると同時にトータルとして，また環境と相互関係を保ちながら存在しており部分として機能することはない．このようなトータルな人間存在は現代科学思潮にあるような単純な機械論では説明しきれないので，折りにふれ精神的説明が渇望される．臨床，基礎歯科医学が対象としている歯，口，舌は現今では解剖学的な知見と実証科学的病因論を根拠とした治療と研究方法が主流であるため，部分観や物質観から免がれたい．しかし，この問題について医学分野では精神的領域との関連の探究がすすめられており，いわゆる文科系学問である哲学，心理学，社会学，宗教学などとの関連研究が報告されている[1]．歯科医学分野では歴史[2,3]，心理学[4]，哲学倫理[5]との関連研究が見られる．

法華経は紀元一世紀頃ほぼ現在の形にまとめられたとされており，三種の漢訳があるが後世に最も影響を与えたのが西暦四〇六年に完成した鳩摩羅什訳による「妙法蓮華経」である．以来，今日に至るまでこの経は諸経の王と言われ，大乗仏教経典の最高峰とみなされてきている[6]．古くは中国の天台宗の大成者，天台智顗により体系化され，わが国では聖徳太子に講ぜられ，平安時代の伝教大師により宣説され，鎌倉時代の日蓮により革命的に広宣流布され信仰の対象とされてきた[6]．またこの経典は仏教のみならずわが国の平安朝や中世文芸にも多大の影響を与えており[7,8]，現代日本でも日蓮系の信仰が広く民衆に定着していてその影響力ははかり知れない[6]．このような理由から法華経が歯科医学の対象である，歯，口，舌をどのように表現しているかということは興味深いことである．

ここでは歯科医学の対象物である歯，口，舌が法華経の中でどのように表現されているかを調べ，現代のわれわれが考える意味と比較する．

---

*1 “Tooth”, “Mouth”, and “Tongue” in The Lotus Sutra

*2 Saburo HIDAKA, Department of Dental Hygiene, Fukuoka College of Health Sciences, Somoku-Sha, Fukuoka　福岡医療短期大学歯科衛生学科・草木社

資料と方法

法華経経典

鳩摩羅什訳の法華経（妙法蓮華経）は，根源の一法を説き法華経の伏線をなす無量義経を開経とし，この一法を再び万法に拡散してゆく普賢経を結経とする[9]．なお根源の一法を明かす法華経は二十八品（品とは章の意味）から構成されている．これら開結二経及び二十八品の各々の章句から歯，口，舌という単語を含んだ語句を拾い出した．また経典は文語体の読み下し文がついているが，現代のわれわれに理解が困難と思われる箇所は現代語訳[10]を用いた．

歯（牙）に関する表現

1）仏の歯

表1に示したように，開経である無量義経徳行品において，“白歯四十猶珂雪”（番号4）とある．ここでは釈尊の歯がすぐれて白いうえさらに40本あることを誉め賛えている．

2）着　色

法華経のすぐれた教えを聞いて随喜し他の人に向かって説く人の歯は垢がついて黒色にも黄色にもなることがない（番号20）．さらに，ほんの短時間でもこの経を聞く人は歯が黄や黒に染まらない（番号23）．

3）形　状

歯の着色には歯の形状や歯並びの記述を伴っていることが多い．例えば，疎かず欠落なく形が曲がらない（番号20）．法華経のすぐれた教えを聞いて随喜ししかも他人に説く人の唇，舌，牙（ここでは犬歯の意味），歯はことごとくみな非常に美しい（番号21）．歯が疎いていたり変形したりするのはよくないこととされているが，“疎く”状態にはヒトが老齢となり自然になる場合と（番号22），仏法上の罰としての，先天的に歯が欠けて疎らな状態がある（番号34）．

4）貸　音

阿羅尼品二十六では3ヵ所見られるが（すべて番号31），十羅刹女の名前を挙げるのに十人姉妹の三番目を曲歯（クータダンティー），四番目を華歯（プシュパダンティー），五番目を黒歯（マクタダンティー）と言うとあり，この場合は当然ながら歯の着色や状態を示す形容詞ではない．また，無量義経十功徳品では“諸の菩薩の無量の道牙を生起せしめ”（番号6）として牙が出てくるが，この“牙”は芽の意味であろう．何故ならこの語句に続いて「功徳の樹をして鬱茂扶蔬増長せしめたもう」とある．これも貸音の一用法であろう．

5）戒　律

もし男の出家者が女のために法を説く場合は，歯をむき出して笑うな（番号15）があり，これは胸を露出するなという語句と共に対女性の禁止事項である．

6）牙

普賢菩薩が6本の牙を持つ白象に乗って現われる（番号32）．なお六牙（白象王）という表現は法華経普賢品にもう1ヵ所，結経において3ヵ所見られる．

口に関する表現

1）仏の口

表1に示したように開経において，口に関して尊貴な釈尊の姿を写して口頬がととのっている“方口頬”（番号2）とあり，方便品では仏弟子達のことを仏の口から生まれた子（番号7）としている．同様に，譬喩品では仏の真の弟子なので仏の口から生まれたとある（番号8）．また，仏の口から経典を聞くという表現もある（番号33）．

2）口臭と消臭

この経典を嘲るならば諸々の罰を受ける．特に，口臭がひどくなり人々に嫌われる（番号9）．しかし賛歎すれば口臭がない（番号19）という意味のことが書かれている．薬王菩薩品の“口の中”（番号30）については，教えを聞いて随喜する人は口の中から口臭を打ち消す青蓮華の香を出すとある．ほかに“口に病なし”（番号19，23）の表現がある．

3）言　う

“口に宣べる，口に演べる”（番号11，12），“口に宣説する”（番号16），口に発露する（番号36）などがあるが，これらは文字通り言い広めることの意味である．逆の意味で口を閉じる（番号17）もある．結経にはわれわれによく知られている熟語の“異口同音”（番号35）が3回出てくる．

4）悪　口

この“悪口”は“あっく”と読むが，法華経経典各品と開結の二経にわたり特徴的に多数出てく

表 1　法華経並びに開結に出てくる歯，口，舌の語句

番号	語　句	読み下し文	開結または法華経各品名
1	作耳鼻舌	耳，鼻，舌をなし	無量義経徳行品第一
2	眉睫紺舒方口頰	眉睫紺舒にただしき口頰なり	同上
3	唇舌赤好若丹華	唇舌赤好にして丹華のごとく	同上
4	白歯四十猶珂雪	白歯の四十なる猶お珂雪のごとし	同上
5	悪口罵辱終不真	悪口罵辱すれどついに怒りたまわず	同十功徳品第三
6	無量道牙	無量の道牙を	同上
7	仏口所生子	仏口所生のみ子	方便品第二
8	従仏口生	仏の口より生じ	譬喩品第三
9	口気常臭	口のいきつねに臭く	同上
10	有人悪口罵	人有って悪口し罵り	法師品第十
11	非口所宣	口に宣べる所に非ず	提婆達多品第十二
12	心念口演	心におもい口にのぶること	同上
13	悪口罵言等	悪口罵言等し	勧持品第十三
14	悪口而顰蹙	悪口して顰蹙し	同上
15	不露歯笑	歯を露にして笑まざれ	安楽行品第十四
16	若口宣説	若しくは口に宣説し	同上
17	口則閉塞	口すなわち閉塞せん	同上
18	不瞋不悪口	いからずして悪口をせざらんや	分別功徳品第十七
19	口気不臭 舌常無病 口亦無病	口にいき臭からず舌常に病なく口にも赤病無けん.	随喜功徳品十八
20	歯不垢黒 不黄不疎 亦不欠落 不差不曲	歯は垢黒ならず，黄ならず，疎かず，亦欠落せず たがわず曲がらず	同上
21	唇舌牙歯 悉皆厳好	唇舌牙歯，悉く皆こんごうならん	同上
22	歯疎形枯渇	歯疎き形枯渇せるを見て	同上
23	世世無口患 歯不疎黄黒	世世に口のやまい無く，歯疎き黄黒ならず	同上
24	千二百舌功徳	千二百のこころの功徳	法師功徳品第十九
25	若以舌根	若し舌根をもって	同上
26	是人舌根浄	この人舌根きよくして	同上
27	若有悪口 罵言誹傍	若し悪口，罵言，誹傍すること有らば，	常不軽菩薩品第二十
28	眼耳鼻舌身意清浄	眼耳鼻舌身意清浄ならん	同上
29	舌相至梵天	舌相梵天に至り	如来神力品第二十一
30	是人現世口中	この人現世に，口の中より	薬王菩薩本事品第二十三
31	三名曲歯 四名華歯 五名黒歯	三を曲歯と名づけ，四を華歯と名づけ，五を黒歯と名づけ	陀羅尼品第二十六
32	六牙白象王	六牙の白象王に	普賢菩薩勧発品第二十八
33	如従仏口 聞此経典	仏口より此の経典を聞くが如し	同上
34	牙歯疎欠	牙歯疎欠	同上
35	異口同音	異口同音にして	仏説観普賢菩薩行法経
36	口自発露	口に自ら発露せよ	同上
37	舌根所作	舌根の所作の	同上
38	此舌根者 動悪業想	此の舌根は悪業の想に動ぜられて	同上
39	悪口両舌	悪口両舌	同上
40	此舌過患 無量無辺	此の舌の過患無量無辺なり	同上
41	諸悪業刺 従舌根出	諸の悪業はいばらの舌根より出ず.	同上
42	断正法輪 従此舌起	正法輪を断すること此の舌より起こる.	同上
43	舌根起五種 悪口不善業	舌根は五種の悪口の不善業を起こす	同上

る（番号5，10，13，14，18，27，39，43）.

舌に関する表現

1）尊貴な姿

釈尊の尊貴な姿を賛えて，その赤味を帯びた舌のすばらしさを表現して“丹華のごとし”（番号3）とある.

2）健康状態

随喜功徳品中に法を喜ぶ人は“舌に病なし”（番号19）また，唇，舌，牙（犬歯），歯も非常に美しい（番号21）と健康状態や審美的状態を示す語句が出てくる.

3）言葉とはたらき

同じく表1に示しているように開経において，釈尊の教えは，唖者に対しては“舌”の代わり（番号1）となる．番号40（舎は舌のこと）と42の舌も言葉の意味である．法師功徳品の“舌功徳”（番号24）の舌とは“こころ（意）”のことである．“舌根”（番号25，26）という表現があるが，この根とは“はたらき”の意味である．本来は感覚器官の眼耳舌鼻身の根拠を持つ五根の一つである（番号28）．結経に見られる舌根（番号37，38，41，43）は上述のように舌の“はたらき”である．また“舌相”梵天に至る（番号29）などの思想や言葉に対する誠実さと人格の尊貴さを表わす表現も出てくる．二枚舌（嘘つきの意味）の“両舌”（番号39）という表現もある.

考　察

色相荘厳の仏

仏の歯は白くて40本あり（番号4），口頬はととのっており（番号1），舌は赤味を帯びていて素晴しい（番号3）．これらの表現は仏の色相を荘厳する表現である．文献的にも所謂，仏の「三十二相」では22番目に四十歯相（歯が四十あること）[11]，23番に歯斉相（歯が揃っていること），24番に牙白相（牙が四つあって鮮白であること），26番に味中得上味相（最上の味感を有すること），27番に大舌相（広長舌相ともいうが，舌が広く長く柔らかく，顔を覆って髪のはえぎわまでとどくこと）の五項目がある．また「八十種好」では口と舌に関して43番に口より無上香を出す，49番に牙は利（するど）し，50番に舌の色赤し，51番に舌は薄しの四項目がある．「三十二相」では22，23，24番に，「八十種好」では49番に歯の理想的条件が記載されている．番号2の語句の意味するところは容貌に威厳があるということであろう．三十二相の25番目には獅子頬相（頬が獅子のそれのように豊広であること）[12]がある．仏の八十種好の22番目に“容儀は備足す”とある[13]．このように，仏の歯と同じく口頬も勝れているということを開経で表わしている（表1）．舌に関しても上述の三十二相にあるように舌の最上味感，広長舌（真実のみ語ることの意味がある），八十種好ではその色赤く，薄いとある．番号3の丹華の如しとはまさにその色赤しということである.

なお仏歯四十相に関しては，40本説を主張するのに，過剰歯を根拠とした説明がある[11]．一方，歯の数にこだわらない説もあり，その場合は“この世にもまれな非常にすばらしい健康で整った歯並び”と解釈する[14]．現代のわれわれにとってはただ歯の数が多く，色が白いことや歯の形が揃っていることだけを強調するのは不自然である．色相荘厳の応化仏である釈尊は三十二相を示しそれが勝れる故に仏への渇仰の心をおこさせ衆生を化導したが，現代のわれわれにとってこのような仏の姿を信じるのは不合理の感を抱かせ無理なことでありこのような仏とは縁がない.

歯の審美性と健康・病気

明眸皓歯は美人の不可欠条件とされてきたが，理想的な歯の条件は法華経以外の仏典にも多数記載があり[15]，それらに共通して“その色の白いこと雪のごとし”（表1，番号4）とあり，現代に生きるわれわれにとっても歯の色の最高の形容詞である．特に，近年は生活が豊かになり歯科治療に対する患者の要求が変化し，歯の色調，歯並び，顔貌とのバランスなどの審美的要求が増加してきている．古今東西，白い健全な歯は美の象徴であり憧れであり健康で明るく爽やかなイメージを醸し出すファクターとされてきている[16].

ところでこれらと対比するに邪悪な状態として，歯の黒色と黄色，疎いたり欠け落ちた状態，嚙み合わせが食い違っている状態，曲がっている状態がある（表1，番号20，22，23，34）．この記述の意味するところはわれわれにも容易に理解できる．このうち歯の着色についてはいわゆる変色歯のことであり，これの現代人の精神面に与える影響は深刻である．なお原因には内因性と外因性

とがあると言われている[16]．また，歯がまばら，欠け落ちる，嚙み合わせが悪い，曲がっている，などの記述は臨床的には，補綴治療上の問題であり遺伝的咬合異常である[17]．

現代歯科医学では口臭の予防治療は生活が豊かになったが故の審美的要求の一つと捉えられており[18]，わが国において食生活の欧米化に伴い関心事となっている．口臭の消臭について青蓮華の香を出す（表1，番号30）という表現がある．これは八十種好のうち43番の口より無上香を出す，に匹敵すると思われる．ところで口の息が臭いこと（番号9，19）の原因は法華経を誹謗するからである．ここにも上述の歯の病気の原因説明と同様，悪行に対する仏法上の罰として口臭が登場する．

病因論

仏法上は歯，口，舌が病気でなくまたその病気が遺伝的でないことが功徳であるとするのだが，実証科学的病因論に慣れ親しんでいる現代人にとってはこの説明では抵抗を感じる．特徴的に仏法では功徳（番号21，22）と罰（番号34）の面を強調する．功徳については“五十展転の功徳”で説明するならば，仏の滅後に法華経を聞いて随喜して人に伝え，伝え聞いた人がさらに他の人に伝え，このようにして五十番目に伝え聞いて随喜する人の功徳でさえ絶大であり，まして最初に聞いて随喜する人の功徳は比較にならないほど大きいということがある．番号22では衰亡枯渇状態と功徳とを対比させなお衰亡状態でも功徳の勝ることによって蘇生復元することを言う．対比的にもしも法華経を誹るならば罰が与えられる．その時に罰現証として歯牙が子孫代々“すき欠ける”（番号34）．このように歯牙を含めた顔貌はとくに遺伝的に罰の例とされている．薬王菩薩品と普賢菩薩勧発品には歯牙すきかけ状態が醜い唇，平たい鼻，ねじれた手足，すがめの眼，臭く汚く悪いできものができた身体，そして膿や血がかたまり腹水病や肺結核などの多くの悪い重病を伴うとある[10]．

罰とは，一般にはある定めに従わない行為がなされた際に，その行為者に対して苦しみを与えることであるが，仏教では因果応報の考え方から説かれる．例えば法華経並びに法華経の行者を誹謗する罪報は最も重罪であり，堕地獄の大苦悩を受けるとされる．一方，功徳とは功能福徳の意味で善行には必ず幸福利益が得られることとされる．俗に神仏を拝んで受ける利益の意味もある．法師功徳品は内面的に捉えて，「是の功徳を以って六根を荘厳して皆清浄ならしめん」とある[6]．日蓮によれば功徳については「悪を滅することが功であり善を生ずることが徳であり，功徳とは六根清浄のこと」[19]とある．六根の清浄とは歯，口，舌に病無しと現われることである．このように仏法上の病因論と現代の科学的病因論と比較するならば，仏法が色（身体）と心（精神）の分かち難い関係で捉えるのに対し現代医学では身体面のみから捉えるところが相違している．仏法は色心不二説[20]をとり，その病因論も独特で仏法病因論と名付けられる[21]．

仏法では生命における差別をもたらすのが「業」である[20]．この業とは日常の行為（Action）のことであり特に道徳的行為を指す．つまり，善と悪の行為が業によって生命の内奥に薫習してゆく．釈迦仏法では十の善業と悪業を説くが，これらは“身口意の三業”[20]によるとされており悪業を列挙すれば，殺生，偸盗，邪淫の三つが身業，両舌，悪口，綺語，妄語の四つが口業，貪欲，瞋恚，愚痴の三つが意業である．このように口業の中に両舌と悪口がはいっているが，身口意の三業中に歯は含まれていないので，仏法上では歯は口と舌とは違う扱いをされている．

六根とその清浄

六牙白象王の六牙（番号32）とは眼，耳，鼻，舌，身，意の六根の清浄をあらわし白象王とは大威力があってしかもその性が柔順であることをあらわす．普賢菩薩がこのような象に乗り末法時代の法華経の行者を守護することを意味する．ところで，ここで取り上げた歯，口，舌のうちで舌だけは舌根として五根もしくは六根のうちの一つにかぞえられる．“根”には三つの意味があり，一つは働きを起こす力であり，作用を有するもののことである．二つは根性とか機根ということで受ける側の資質や可能性のことをいう．三つは結果をもたらす原因のことをいう．このように根の主体である舌の働きとは言葉とか思想の意味であり，現代のわれわれの使用する意味と同じである．

この清浄が治療や予防的に良好な衛生状態であろう．歯科医学的には“口亦無病”（番号19）と“世世無口患”（番号23）の語句が最も治療と関係しているものである．ただし，その理由とは勿論，常

日頃，口腔衛生に留意しているからではなく，法華経を“聞く人”のことである．

音の貸与

十羅刹女とは鬼子母神の十人の娘達で本来は悪鬼であったが法華経の行者を守護することを誓うようになったものである．歯を梵語でダンタと発音するので名前を記載するのに歯の文字を使用したのである．また，ダンタには32という数の意味がある[14](番号31)．これと関連して現代英語のデンタルは歯の形容詞であり，成人の歯数は32本である．また，道牙（番号4）の牙とは“芽”である．因果論的に考えれば道芽とは道因であり，菩薩が仏法を求める気を起こすことであり，樹の繁茂はその結果として得られる道果である．

修行者

歯をむきだしにして笑うな（番号15）とは女性にたいしてなんらかの欲望の想いを生じて，それによって法を説いてはならないということである．ただし，臨終成仏相の半眼半口は当然歯が見えているわけであり，歯吹如来[14]の例にもあるようにいつでも歯を見せるのが悪いとされているわけではない．

法華経行者の難

最後に法華経が何故説かれたかということを考えてみたい．法華経の肝腎は仏の滅後の後の五百歳，即ち末法時代に衰えた釈迦仏法に代わり本化地湧の菩薩による弘教にある．そして，法華経を一旦言い出す（宣べる，演べる，宣説する，発露する）ならば難が競い起こるとある．“悪口”を言われることがその難の一つなのである．また，法力がその悪口をいう口を閉塞させることも記されている．法華経行者はあらゆる迫害を試練として受けとめ，中傷誹謗をものともせず，法を世界中に広宣流布して断絶させてはいけない．

結　論

紀元一世紀頃にまとめられた法華経には歯，口，舌という単語を含んだ語句が頻出する．これらの単語は釈尊とその仏法を賛嘆するために，三十二相八十種好の中に含まれている．その好例が白い歯，色赤い舌，最上の香を出す口という表現である．ここに現代のわれわれが理想とする歯，口，舌の審美的，健康的で良好な状態が起源すると思われる．なお仏法上では歯を含めた顔貌の異常と病的状態は悪因による結果の例とされている．その場合，仏法上では意味が深く，現世のみでなく過去世と来世をも含めた三世にわたる身口意の三業で捉えている．その上われわれの歯科医学の考え方が身体のみに片寄っているのに対し仏法では心身両面からのバランスを重視している．また歯と違って，口と舌に関しては特徴的にこれら歯科医学の対象物が思想，言葉ないしそれらを発することと密接に関係していることが明らかである．

文　献

1) 中川米造 監修：講座 人間と医療を考える（全5巻），弘文堂，東京，1992.
2) 川上為次郎：歯科医学史，科学書院，復刻版，東京，1988.
3) 中原　泉：歯科医学史の顔，学建書院，東京，1987.
4) 押鐘　篤：歯科医療心理，学建書院，東京，1988.
5) 国本朝雄：人間歯科医療，シエン社，初版，東京，1987.
6) 鎌田茂雄：法華経を読む，講談社学術文庫，講談社，第7刷，東京，1997.
7) 今成元昭：『法華経』と平安朝の文化・文学，国文学61，6～15，1996.
8) 濱田哲通：『法華経』と中世の文化・文学―法華経享受史の素描，国文学62，10～17，1997.
9) 創価学会教学部 編：法華経並開結（上下），聖教新聞社，第12刷，東京，1986.
10) 三枝充悳訳：法華経現代訳（上中下），レグルス文庫，第三文明社，初版7刷，1974.
11) 中原　泉：仏陀の歯相，日歯医史誌21，195-201，1996.
12) 創価学会教学部 編：新版 仏教哲学辞典，聖教新聞社，東京，1985，595～596.
13) 創価学会教学部 編：新版 仏教哲学辞典，聖教新聞社，東京，1985，1414.
14) 長谷川正康：歯の風俗誌，時空出版，第1刷，東京，1993，136.
15) 福永勝美：仏教医学事典，雄山閣，東京，1900，284～286.
16) 久光　久，松尾　通 編：歯の漂白，デンタルフォーラム，東京，1992.
17) 田中克己他：臨床歯科遺伝学，医歯薬出版，第1版第2刷，東京，1986.
18) 角田正健：サヨナラお口の臭い，医歯薬出版，第1版，東京，1995.
19) 堀　日亨 編：日蓮大聖人御書全集，創価学会，東京，1983，762.
20) 川田洋一：生命哲学入門，レグルス文庫，第三文明社，初版，東京，1981.
21) 川田洋一：仏法と医学，レグルス文庫，第三文明社，初版，東京，1985.

著者への連絡先：日高三郎
〒814-0193　福岡市早良区田村
2丁目15番1号福岡医療短期大学
TEL：092-801-0411，内線108
FAX：092-801-4473